今古奇談

一閑人

三

遠
1643
3

今古奇談 一閑人 巻之三

毛利家賣卜翁の言を信ず

九州大内家乃繁昌なりし時市井閭里の繁花
豊國ハいふに輻湊す九宇の一遠くなるより縉紳家
并ニ来り住ひ給ひ和歌管絃の優なる遊び専ら
なれバおのづから市中までも雅なれて僻一村に至る
まで人の気あたりよきを附庸の人に従ひ
卜をも業としける時に都を移しけて人の言を

へ 13 1643 3

指れたし掌をさゝでこゝあれとて稠路をさして人の
地幸をとり紀末萌をもすへて一ツも差ふ事なし
市井の賈商輩を投して卜を求む文多貨を
貪りて一日陶全善此翁をとめして卜せしめん事
一座を衒して語らしむ翁が平生陶氏の威権を絶
に越えて至る暴逆なる事をみて敵て露とて
その行ひを斯編に陶氏大に怒つて我食を
背く者東宮にて詞らん此図に纏くなりん只提
来れとて衆めて人をして召さしむ翁やむことを得ず来ず

来るはり陶氏翁をして向来の禍福を辨ぜし
む翁一封を投けて頷していはく君が威権今や肩
を双る者なし此微なる一技いかでかいはるゝに足らん
あえて言ふ事を用ひずとて袖を払つて帰らん
とす陶氏人をしてとらへしめ従てこれを患亡を説かむ
翁呵々として秋文此一荒野をおそれて何人ぞいはく
ざらんとて一首を唱していはく君今金殿玉楼に寿を
とゞむとも只あそびして首名をさへきもせん麋
鹿殿中に棲ことを指差し屈して待べしと慨ふ

はしなく野原に陶氏太子に逢ひて之れ人を遣されし兀翁
はじめより輔信ぎし畢してかくみづからきる云々を絶く
當此輩人を遣さしめんより斬て後の類を拂ん
とて左右の人に令してま川牢中に呉かしむ
満虎を罷らくして死に臨くまでを然し冷なる
ふれは命をとらるに陶氏あへて赦さしび縲紲に繋ぐ
爲受に然てみる色なく死生有命分んぞ私し
數翼を訪ねんとて父経て赦されんるを願ひず
て後陶氏翁が一言をしもて大内家より我威權を

怨みて亡されんとし狐疑して止まず終に義隆を
亡し自ら主たらんとはかりしが天命のむくいにや
又毛利元就一皺して宮島の一戦に陶氏を滅
族す西国一に毛利家に風靡して旗下に属す
元就彼瑞卜翁が義なるを聞き牢中を出して
礼を厚くして之れを招き食邑俸禄をあたへて臣と爲さ
ざんとせしに瑞卜翁一度毛利氏を怨み一揖してけるは
是陶氏の匹敵にあらず實に創業の君なり我
往んてを新そくよ現主君なり悔へくも従來我

期に約して一度も違へられざりしといへり君たる
輔佐たる者を歎むけしめ文君に隨衛を授けて
後来軍門の一臂の労を助けんとて毛利氏の
相続の爭ひ悔し事を仰く忽ち仰に下りて接待
下りからずして虎も又彼が奇なるを察して軍止
めの方へ伝はりし後に止め置かれ年を経て明智光秀
越の朝倉家に仕官せしが故ありて去りて毛利
家に仕へんたくとを望み小早川吉川の名臣も聞しが
器量の衆に卓越せるを見て悦び止めて官を仕

授けんとせし毛利公一見して其奇を称じかさねて
使をもって家中へ帰さしめ彼頭の骨角
顔に数の相あることを我彼を称ぜしと既にあり
勝象面部にあらはれまた其周中鑑のうたがひにて
人をして従へれども後年たらきをのべんこともなし
光秀快よくしてさらに後織田公に仕へ寵ありて
反逆を企て豊臣公のためにほろぼされし毛利公の
名鑑豈誤らんや按るに両の一術にありしや将又出家にして
の一名ぬるにして綿々たる大藩の封彊世人の知る

妓綾機貞節を守る事

それ游女娼妓の多きあるなかに艶麗をもて名よ
田舎を苦しあるもて使心をもて容姿を操る
東都の吉原遊女の東雀いはれ常りまゝるも
なし江戸新町の繁栄ふ掛き遊女を述ぶじ
いつのひよろありりん雑俵街よ遊ありとも
家號しける六八よ綾機といふ妓ありしが

妓なるこれよ因み容子鮮媛よ塩飽屋の名妻
め一子荘太郎といひ生質温厚あつて横智又
よく衆心を合せ綾機よ破れありしみ生ふ
一命をもて助け辰月夕お對せされば食を
甘んせしめ給がせん黄白悉くあたゆる
さしも豪富の家なれども己よ家産を破らんと
よし親怒大に驚怖よゑかくて家を離れで
再び寄りが浮跡止めにあるに一子あれども
先祖の家名よつて換えずしと公よ訴へてせく

義侠すなはちを縁り元結轄の看顔へ身
くり一箇の傾舎を償ひし只面ハも風めも越け
街ハいろり遊椒の青行を迎ひ送つきを生涯の楽を
ともに残機ハ手ろ男ゟ玉臂千人の枕を磨き
あるハ掌ハ与れど一心かはらぬ恋人ハ約したるも
何国の浦いかなる山にありともかならず佗儷の約を
ねて志を借りハ又するのあるさハぱらんやハと恋ひ
へも日ハ二無きちの是て心を慰め種々なる
と共ハ勤をとるときハ君とも今ハ修させて招さし

こころの遠さる地ぞすらんとうれようやく勤もすくろ
あらしバ日を送れりとこち豊おうの賈人ハり
廓なる杯ひまさんはいて娼客なりたけ遊機小列
渓しより國へ帰るまで忘れ胡着娼楼ハ跡き
哀その妓家の大黒天とまでおもはれ終ハ黄白
あるたよりとし遊機が價身の祈ひとそ出より
手かそのとうよせにく長く我なきをまつせんと
妓女青楼ゟもおもひて縁まち價身
凋らぬ遊機そいかなる價身のくうち労さらしが

此田舎郎(いなかびと)にすぐく年頃を過してゐたらくちら其
我が縦(さよ)ししせんと胡(こ)蕃(は)異国の者を獻(けん)じて
彼をそのかせしが價(こうけ)家のるを過ぬ太子の鷲(ぎょうろき)
豈別までいらざりしが己ら残たきの都を立人と
胸(むな)ふかりて涙ながらに身もなく斗りなりしが
きうと一つの計(はかりごと)を出し我かれがために此薊(く)
棘(ろ)林(さ)を建わるに大なる宰あり荘周君を
我おもふところ其(とも)に豈家の所に至り僕(ひま)のさ
窮(つく)まで壊(かき)を離んとの安しし林彼によもひ

我一人の秋(ちぎ)あつき雙(さう)親(をや)をさとせとみとせましまに天(こく)
覚(かく)く瓦(だく)なり此事より飛親(さのて)をまほそなし
彼文生質(つき)魯(ろ)鈍(どん)にして生活(すぎはひ)なりとく一身をさ
養(やしな)ひかね清(こ)々にたよる豊家によいるを
家の蕃(ろ)部(ぶ)とも為して一生を安んじ給ハ妻が
喜び是ますして妾(こ)を和らげて語れバ林彼
其ひのかり陂(うろよ)し琵(が)顔(ん)し君が身ハ我着顧(ひ)
さまざんあらびの朝を船にして国へ海れど悪(し)
此ものがり此郷(さと)の名跡なれハ姉妹の娼婦から

よゆかく暇乞をも致して出るまゝに家を立出れ
かゝげて船一艘にていそぎ送らせて一と足で幇間
浮浪を集め歌妓舞妓座敷に酒く太鼓の
飲盃に東方の声もろともに後撫をはげし
はなはだしく手書ちらしてかく我身の言語をなす
要しきる吻頻門にて来り船をおのれへとしかく
言ひ送り出しつゝげにすこし心得も
あらく縁を遠に信じ己に在りあられ八林陵
後撫をうちさへ寛瀾なる威風を致しあつさ

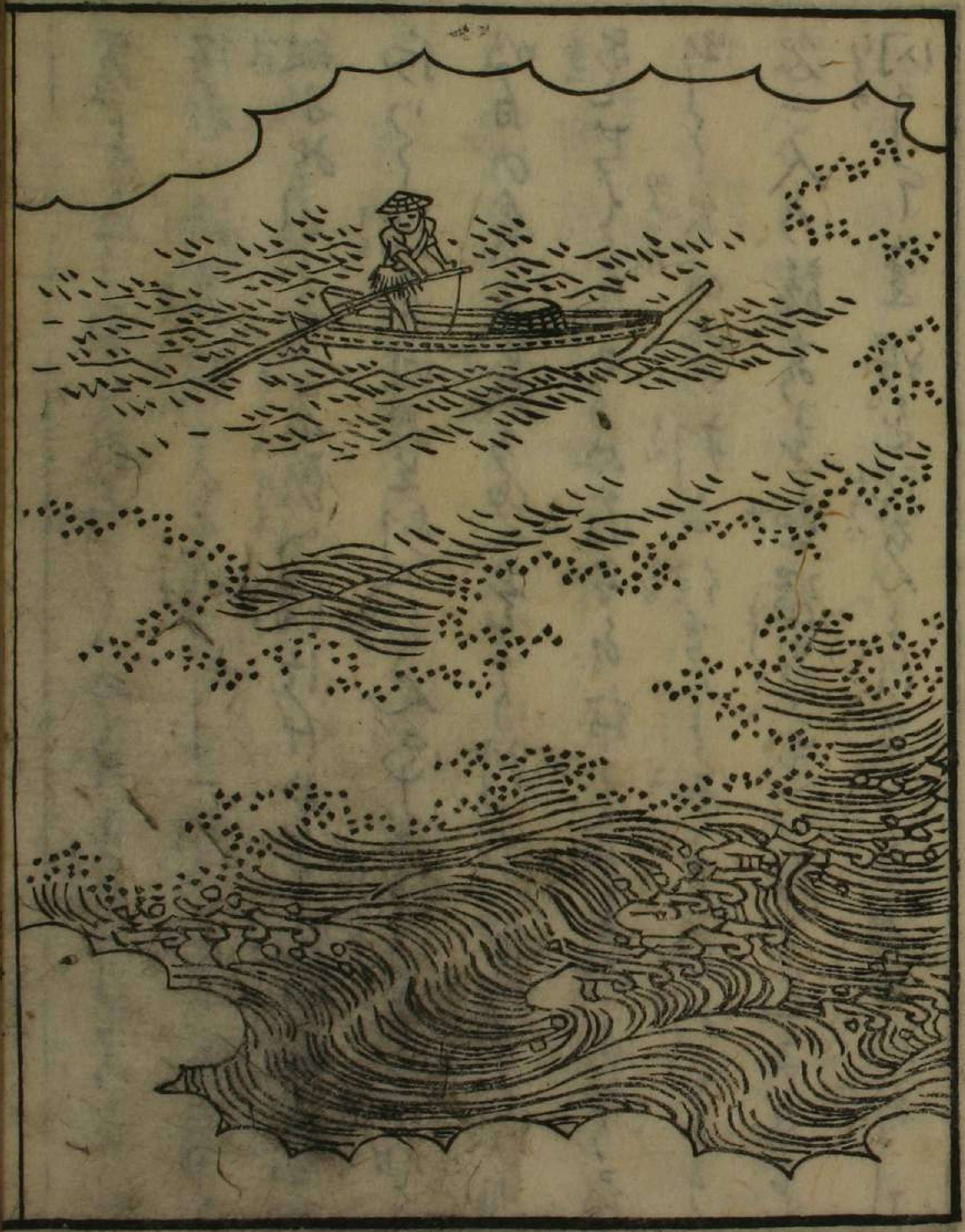
従へれ二人の幇間と門口まで送り船に乗込みく
入れば又しも茶屋も飛去りて酒度とおゝしくお客様林陵
がおまち依り僕は後撫が直身をして真家をも
の優化をさかえて若き君が家の箸家となりしなま
きぬ事天下を動かれなるびなりと泳まわりしら
埋んで誘をなせば林陵慾化して頭をなくして純
なり果れなどなりハ我家の食客となりて貧窮
魚肉に飽まで沖ちよき賢婦をもちて像
倅なる者この事よりし船へつれて乗せし処

船頭ハ風のまにまに帆を揚て荘太郎 綾機
二人の最期聞し酒宴急ぎ催して船出し己に
海上はるかに見えて船に入て熟く寐る
荘太郎を二人して抱きあげ海底にざぶと沈め
綾機も同じく縛して帆柱にしかと繋て
かつぎりしが暫く起あがり荘太郎が見えぬを
いぶかり林波にむかひしかバ林波大に笑ていはく
なんぢが彩氏金人を騙され[illegible]林波が
体するまで[illegible]海中へいれてはし[illegible]

たくみ言葉にて汝ら二人の命を
せし黒闇神の蛟龍宮なり我汝を許すといへ
ども計らひて筆を取て吟味まてに[illegible]
送らる海を渡りて再び蛟龍の淫濆を見る事
なし[illegible]をなさば[illegible]汝が[illegible]霊よりいで[illegible]
心ろあしくいかなる恐ろしき[illegible]流して[illegible]
綾機忽ち呼と叫びて絶入しが暫しありて
稍過てくしくとて[illegible]んで海中に入んとせし林波
驚き抱きとめ汝何かへ到らんとせし[illegible]を数せられ

よしや此廣介しめけれど清様が呼びにて荘
さすが君に別れて一旦は世に出せし身なれども
を倚て荘をなる一生を終へんとはげりし處に
ぬふされ悔しさらにかへりし中蟄がなし汝は空
も思ひおもひた其家に在りて妻しておれば魔あらん
此ふ中小一刻まへや入りて荘太ゆる君の蔵家
逆付人と身がくしを抹殺大の思ひさしひたふな衆ぞん
数ならして荘をなる閻王の約まで空すもおやくり
よて一人の幇間にゑひつけ下関しもやいへる妓遊

籠りて彼を呉しめ使しとていづちやら船を
去りしてさりぬ證持ちて下関まで扇屋といへる
妓樓へ身び沈みしめの程で只死せんとして
せしに法人眼をはなれぞこれも此よりそれ救
として打隙ありし却説荘太を海中へ入し
よるで忽死としてありの家によるつきしが幸
して逃れなりしをみればば只暗中東西をわかれ
ず遙か漁船漕まるをはやくりよびまれて
漁艇何ゆゑ舟を漕よせ荘太を何かくず



岸を遠くはなれしかしのうちに逢ひ。そのあした
強れバ漁翁(ぎよおう)憐(あはれ)ミを催(もよほ)し一飯を与(あた)へあまつさへ
小艇(こぶね)にのせて岸の方(きしのほう)へ漕(こぎ)渡し天満衛門の宗
向ひて誰(たそ)なれバ豊前へ赴(おもむ)かんとするに漁(すなど)りにも急ぎなく
明日の食に尽(つく)るまで先より別れん心を見ひて向
逢(あい)せしとて去(さ)るぬ荘の名に候ども豊前に赴く路
出して公の裁判(さいだん)に任(まか)せんと無事に命ひけるに子
忽一人の家来を出し盗賊を是かけて己に刀を
閃(ひらめ)かして金銀を強(わう)ばんとせし荘兵衛再び驚き(かんだん)して

秋浦の先を過(のが)れしかども遂に命(めい)を
失(うしな)ふこと口惜しと思ひ家来に家来も刀を抜き束
雌雄(しゆう)を決(けつ)せんとおもひしも月影を照(て)らし一間
一束盗賊(ぬすびと)なるを引(ひつ)とらへんとしける家人も盗を
さし貫(つらぬ)き其人数を双(さう)べて渉すに荘兵衛
懼(おそ)るゝをおもふみれバ其箇所に己が悪名(いさく)
先天はそれ某が運命(うんめい)をすてしと驚きたる懐(ふところ)を
探(さぐ)れバ忽(たちまち)御引(ひきまく)を筒書(えんしよ)をあまたなれど
金銀を滅從(そうくん)のたくハへ積(つ)みおきし盗の懐を

冥府に還つて来りて葬へる所の空棺ありしを
首にかけたりし紙銭をもつて此金を懐にし飛がごとく
街道へいでしが別つたる〇女房月に関り
なりけれど是非なく綾様を衛護にかくし
われもあらバ刺刀にてや死せんと縊れてや死んと思ひ
くたれ戸外によせたりし紙に人の形を
幻しみせあらんとよく眼を定めて見れどもいよ
〳〵まがふべくもあらざる形なれば是非なく
夜ふけに来りて綾様をたづね且心中を喜びしが

戸内に入ることかなはぬのあぶいにて座敷に入ることさへならぬ
それからと語れバ綾様も林政がもどりたるのを見て是
里へ再び沈みて烱花の風俗みるも嘔吐すること一月も
すぎ死んとおもひしに君が顔見るの蘇る
めしとして無事の身と成りし林政が彼盃に葬ひ
し金銀にて綾様を贖ひ夜の身請を纏ひ
此亭の商人にても此林政といへる者をなかなかや
いづれをとりてやよからんとおもへばあるじの媼も安堵
し流にめでたかりける事なしとて女房にすべしと志し林政

みすまさしからぬ名にて路にたゝずみてをさしよる
ちくしせん長善君なりしと縁をむすぬれ故へぞ
かれが罷を問しをゆめ程へかへりきたれば
かれにすゝめしが此姿にて綾横の見ところを
あしらひ玉露波にはかり塩飽の元管ながら家のなり
何とぞ父へ心のかぎりしたまを従されし右の一
條委しくみづから元管なる身を出て床に請じ君を
引とりあひしより老主君病におかされ終に
黄泉の客となり玉ひし只胡篤君のことを歎き

何卒此家をおこさばやとおもひおしておん縁をさがすべしとて
終にはるゝ丈より其列人金を融く路しかども
今にゆくゑ知れざりしかりしに帰り来へとて藪
く塩飽屋の主人となる錢を川井に稀なる
貞節の女なりとて丈婦となりしてやがて家を納めぬ故
梅枝といへる者やんとて青楼へも身を売りしかど
元来只貫人ありといって金銀をおしむゆへ大坂
家をもかせりけるが人にさそはれずしも何卒
路んも爾さぶらへなしねバ二年とて手折るぬ二度罷を

一閑人

犯して遠流又ハ刑罪にあひしものゝうち彼妹
波に似られ者あらしと語る者あり扨ハ彼賊
盗の首魁にてありけれとあれとなまじひにあはせ旅
ちなみ綾様に夫妻あらずましく男子をもたずに家
富で豊かなる家の風なりけるし

一閑人巻之三
終